

<原 著>

自閉症スペクトラム傾向の高さが精神健康度と
被援助志向性および大学生活に及ぼす影響

高林 大輝* 藤井 靖** 菅野 純**

要 約

本研究では、一般大学生における自閉症スペクトラム傾向の高さが、精神健康度および被援助志向性に及ぼす影響を検討した。その結果、自閉症スペクトラム傾向が高い学生の方がより精神健康度が低くなりやすい可能性があることが示唆された。また、被援助志向性は精神健康度とはあまり関連がないことが示された。さらに、学生生活で苦手と感じる内容と自閉症スペクトラム傾向との関連を検討したところ、学生全体で共通した苦手さが挙げられていた。一方で、自閉症スペクトラム傾向が中程度または高い学生の群でのみ見られた回答もあり、なかには〈他人の気持ちや雰囲気を感じること〉、〈将来へのポジティブな展望〉など自閉症スペクトラムの特性との関連が推測される内容も含まれていた。

キーワード：自閉症スペクトラム, 大学生, 精神健康度, 被援助志向性

問題と目的

通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査（文部科学省，2003）によると、小・中学校の通常学級に在籍する6.3%の児童・生徒が発達障害を持つことが疑われている。一方、内藤・山岡（2007）がLD親の会の会員を対象に行った調査では、発達障害のある人の大学進学率は19.3%に上っている。平成22年度学校基本調査（文部科学省，2010）では、高等学校卒業者の大学・短大への進学率は54.3%に達している。少子化による大学全入時代の流れに加え、AO入試など入試スタイルの多様化もあり、発達障害のある大学生は今後も増加することが予想される（辻井・宮本，2000）。

また、発達障害があったにもかかわらず、適切な教育的支援を受けぬままに児童期を通過し青年期に至っているケースも決して少なくはな

い（浅川・市橋，2007）。なかでも、アスペルガー障害とPDD-NOS（特定不能型の広汎性発達障害）については現在なお診断が見過ごされるケースが多い（十一，2006）。山崖（2008）は、大学における発達障害学生の中でも、アスペルガー障害が疑われる学生の存在が目立つと述べている。

臨床群の人が持つ障害様の特徴は、診断基準を厳格に満たさない健常群の人のなかにも存在することが考えられる。つまり、発達障害のある大学生が持っている特性のかなりの部分は、一般の人でも程度の差こそあれ持っている（斎藤，2010）。しかし、対人関係の構築や集団適応が不得手（佐々木，2010）であるなどの自らの問題のある程度自覚していながら正確に把握できず、それを是正できないことは大変なストレスになる（福田，2007）。コミュニケーションの障害が目立たないことと、障害がもたらす困難や問題の大きさは比例せず（十一，2006）、適切な対応や対策がとられないと、さらに二次的に問題行動や情緒の障害を引き起こすことが

*早稲田大学大学院人間科学研究科

**早稲田大学人間科学学術院

多い(飯島, 2005)。そのため、臨床診断的には閾値下であっても、症状を量的に評価し、適切なアプローチをする必要がある(黒崎・増田・岡本・矢式・松山・石原・岡田・杉原・古本・内野・磯部・栗田・二本松・横崎・日山・吉原・山脇, 2009)。

一般成人にも存在する自閉性の把握や高機能の広汎性発達障害のスクリーニングを意図して開発された質問紙としては、自閉症スペクトラム指数(Autism-Spectrum Quotient: AQ)が存在する(Baron-Cohen S, Wheelwright S, Skinner R et al, 2001)。一般大学生を対象とした、自閉症スペクトラムの実態調査では、およそ4%の学生がアスペルガー障害に対するカットオフポイント以上の得点であったとの結果が示されている(小林, 2006; 北添・藤田・寺田・是永・泉本・植田, 2009)。しかし、いずれの研究においても、AQ得点がカットオフポイント未満の、潜在的に困難を抱えている可能性のある学生に対する支援の必要性についての検討は十分になされていない。

個人が支援を必要としているかどうかを示す指標として、被援助志向性が存在する(水野・石隈, 1999; 田村・石隈, 2006)。被援助志向性とは、「個人が、情緒的、行動的問題および現実生活における中心的な問題で、カウンセリングやメンタルヘルスサービスの専門家、教師などの職業的な援助者および友人・家族などのインフォーマルな援助者に援助を求めるかどうかについての認知的な枠組み」である(水野・石隈, 1999)。学生が支援を求めているかどうかを検討することにより、学生に対して何らかの支援を実施する必要があるかどうかを探る上で大きな示唆を得ることができると考えられる。

そこで本研究では、一般大学生を対象に自閉症スペクトラム傾向の高さが精神健康度および被援助志向性に及ぼす影響を探るとともに、自閉症スペクトラム傾向の高い学生が問題を抱えないための支援の必要性及び方向性について検討することを目的とする。明確に診断基準を満

たしていなくても、自閉症スペクトラム傾向の高い学生が、どのような場面で困難を感じ、支援を必要としているのかを検討することは特性に配慮した支援方法を考えていく上で一助となりうることから、意義があると思われる。

方 法

調査対象

首都圏の4年制私立大学、A大学(東京都)・B大学(東京都)、4年制私立女子大学のC大学(埼玉県)に在籍する大学1年生から4年生までの学生420名で、有効回答率は81.2%(341名)であった。有効回答者の内訳は、男性62名(18.2%)、女性279名(81.8%)、平均年齢は19.6歳($SD=1.15$)、学年別の人数(構成比)は、1年生172名(50.4%)、2年生87名(25.5%)、3年生66名(19.4%)、4年生16名(4.7%)であった。

調査時期

2011年11月に調査を実施した。

調査材料

①フェースシート

年齢、学年、性別、学内外の心理相談機関や心療内科等への相談・受診の有無の記入を求めた。

②自閉症スペクトラム指数日本語版16項目短縮版(栗田・長田・小山・金井・宮本・志水, 2004) 自閉症スペクトラム指数(Autism-spectrum Quotient: AQ)(Baron-Cohen. et al., 2001)は、自閉性障害の症状を特徴づける5つの領域(社会的スキル・注意の切り替え・細部への注意・コミュニケーション・想像力)を査定する。各領域10問ずつ全50問で構成されており、4件法で回答を求め、各項目で自閉症傾向とされる側に回答すると1点が与えられる(若林, 2003)。定型発達者も含む自閉症スペクトラム傾向を測定する尺度として、信頼性及び妥当性が確立されている(北添ら, 2009)。本研究で使用した自閉症スペクトラム指数日本語版16項目短縮版(AQ-J-16)は、AQの日本語

Table 1 状態被援助志向性尺度を基にした質問6項目の項目内容

1. 自分が苦手に感じていることについて、誰かに話を聞いて欲しい。
2. 自分が苦手に感じていることについて、適切な他者からの助言が欲しい。
3. 苦手に感じていることについて、一緒に対処してくれる人が欲しい。
4. 苦手に感じていることへの対処の仕方について、他者のきちんとした評価が欲しい。
5. 苦手に感じていることにまじめに取り組む自分に対して、他者からの励ましが欲しい。
6. 苦手に感じていることへの対処の仕方に関して、自分のモデルに出来るような学生が身近にいて欲しい。

版 (AQ-J) (栗田・長田・小山・宮本・金井・志水, 2003) を基に, 栗田ら (2004) が, アスペルガー障害の診断と有意に関連する16項目を抜粋して構成したものである。

③日本版GHQ精神健康調査票12項目版 (GHQ-12) (土井・尾方, 2000)

本研究では, 中川・大坊 (1985) による邦訳版GHQを基に作成されたGHQ-12 (土井・尾方, 2000) を使用し, 採点方法は各項目で精神的に不健康とされる側に回答すると1点が与えられるGHQ法 (中川・大坊, 1985) を採用した。なお, 精神的健康と不健康を判別するカットオフ・ポイントは4点が適当であるとされている (土井・尾方, 2000)。

④大学生活の中で苦手に感じていることについて回答を求める自由記述質問項目

「あなたが大学生活の中で苦手に感じていることをお書き下さい。」という教示文により尋ねた。

⑤④の回答に関する, 状態被援助志向性尺度を基にした質問6項目

田村・石隈 (2006) は, 被援助志向性には, 現在抱えている問題に対する援助の欲求を示す「State (状態)」と, 援助を受けることに対する認知傾向を示す「Trait (特性)」の両側面があるとして, 「状態・特性被援助志向性尺度」を作成した。

本研究では, そのうちの「状態被援助志向性尺度」を基に, 大学生活の中で苦手に感じることに関する被援助志向性を問う質問項目を作成し使用した。全6項目の内容は, Table 1に示す。

調査手続き

大学における講義冒頭または, 講義終了後, 当該講義担当講師の許可の下で受講生に回答を依頼した。倫理的配慮として, 回答は任意であり, 回答の有無や内容によって不利益は生じないこと, 途中で回答を中止しても良いこと, 得られた個人情報統計的に処理した上で, 研究以外の目的には使用せず, 厳重に保管することをフェイスシートおよび口頭での教示の際に説明し, 調査への参加合意を得た。調査用紙配布後は, 調査者がその場に待機し, 回答済調査用紙の回収を行った。調査開始から終了までの所要時間は, およそ10分であった。

結果・考察

大学生の自閉症スペクトラム傾向の高さ

本研究において分析対象となった341名の大学生のAQ-J-16得点の平均は, 6.67 ($SD=2.82$) 点, 男女別の平均得点は, 男性6.65 ($SD=3.05$) 点, 女性6.67 ($SD=2.78$) 点であった。また, 栗田ら (2004) がAQ-J-16においてアスペルガー障害のカットオフポイントとして適切であるとした12点以上の学生は, 18名 (5.3%) であった。栗田ら (2004) の男子大学生・大学院生 (72名) でのAQ-J-16得点の平均5.70 ($SD=2.8$) 点や, 小林 (2006) の大学生 (1797名) でのAQ-J-16得点の平均6.82 ($SD=2.7$) 点と比較しても, おおよそ同程度の平均値が得られた。このことから, 臨床群以外では全く障害様の特徴がみられないというわけではなく, 程度の差はあっても, 一般大学生の中に少なからず, 障害様の特

徴を持つ学生が存在するということが示唆された。さらに、広汎性発達障害の男女比では、男性が圧倒的に多い(飯田, 2004)といわれているが、調査対象となった一般大学生の男性(62名)と女性(279名)の比率に偏りがあったものの、栗田ら(2004)や小林(2006)と同等の平均得点が得られた。このことは、必ずしも診断基準を満たさない一般大学生においては、障害様の特徴の持ち具合に性差はみられないことが推測された。

自閉症スペクトラム傾向とその他の変数との関連

まず、自閉症スペクトラム傾向、精神健康度、状態被援助志向性の関連を検討するため、AQ-J-16, GHQ-12, 状態被援助志向性尺度の得点について相関分析を行った。その結果、AQ-J-16とGHQ-12には有意な弱い正の相関($r=.26, p<.01$), AQ-J-16と状態被援助志向性尺度に關しても有意な弱い正の相関($r=.11, p<.05$)がみられたもの、精神健康度が及ぼす影響を統制すると、有意な偏相関は見られなかった。さらに、AQ-J-16に含まれる下位項目(コミュニケーション、社会的スキル、想像力、注意の切り替え)ごとにGHQ-12との相関分析を行ったところ、コミュニケーションに関する項目との間($r=.28, p<.01$)および、注意の切り替えに関する項目との間($r=.22, p<.01$)に有意な正の相関がみられた。AQとGHQ-12が有意に関連し、GHQ-12で4点以上の人は4点未満の人よりも有意にAQ得点が高くなるという報告(Kurita & Koyama, 2006)があることを踏まえると、自閉症スペクトラム傾向が高い人は低い人に比べ、より精神健康度が低くなる可能性が高くなると考えられる。発達障害を抱える人が自らの問題のある程度自覚していながら正確に把握できず、それを是正できないことは大変なストレスになる(福田, 2007)ことは、厳格に診断基準を満たさない学生の場合にも当てはまると考えられ、そのためにより多く障害様の特徴を抱える学生の精神健康度が低くなる

結果となったのではないだろうか。それに加えて、とくにコミュニケーションに関する特徴や注意の切り替えに関する特徴をより多く持つ学生ほど、精神健康度が低くなる可能性が示唆される結果が得られたことから、学生生活の中では、コミュニケーションや注意の切り替えに関する苦手に直面しやすい状況がより多く存在しているものとも考えられる。また、AQと被援助志向性との間に明確な相関が見られなかったことから、自閉症傾向が高い人が必ずしも支援を求めているわけではないことが考えられるが、その背景として、障害様の特徴を抱えながらも、自分なりの対処スキルを身につけている可能性があり、自らの持つ特徴が困り感につながっていない学生が少なからず存在することが推察された。

自閉症傾向と被援助志向性が精神健康度の高さに及ぼす影響の検討

AQ-J-16の平均得点 $\pm 1SD$ を目安にし、AQ-J-16得点が4点以下であった学生を「自閉症傾向低群」($n=76$, 全体の22.3%), 5点以上8点以下であった学生を「自閉症傾向中群」($n=182$, 全体の53.4%), 9点以上であった学生を「自閉症傾向高群」($n=83$, 全体の24.3%)に分類した。さらに、各群において、状態被援助志向性尺度の平均得点(21.81, $SD=5.55$)を目安に、22点以上の学生と22点未満の学生を、状態被援助志向性高群と低群とに分け、全ての学生を計6群のいずれかに分類した。

そして、その6群をもとに、精神健康度(GHQ-12)を従属変数とし、自閉症傾向と状態被援助志向性を独立変数とする3(自閉症傾向低群, 中群, 高群) \times 2(状態被援助志向性低群, 高群)の分散分析を行った(Figure 1)。自閉症傾向に関しては有意な主効果がみられたが($F[2, 335]=5.34, p<.01$), 状態被援助志向性に関しては、有意な主効果はみられず、有意な交互作用も認められなかった。また、多重比較(Turkey HSD法)の結果、自閉症傾向高群の

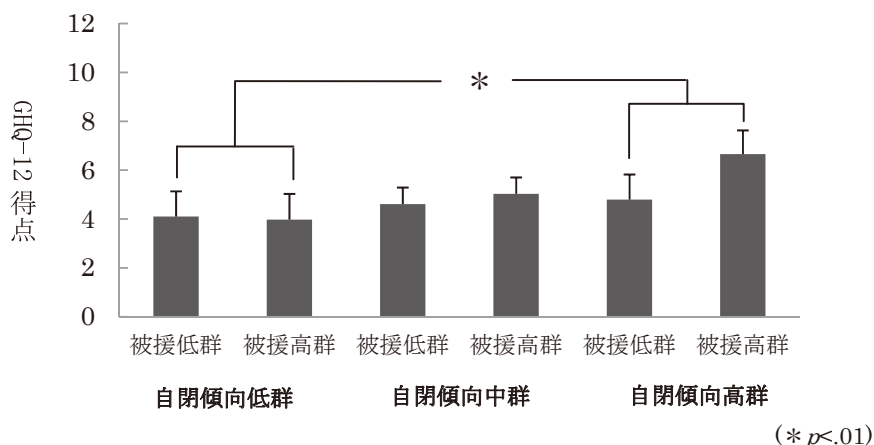


Figure 1 自閉症傾向，状態被援助志向性とGHQ-12得点との関係

得点は，自閉症傾向低群より，1%水準で有意に高いことが明らかになった。これらの結果から，自閉症傾向が高い人は，低い人に比べ，精神的な健康に関するリスクをより抱えやすいことが示唆された。また，有意な主効果はみられなかったものの，自閉症傾向高群の中では，より強く援助を求めている人の方が少なからず精神健康度が低くなる傾向が示された。これらのことを考慮すると，障害様の特徴をより多く持つ学生は，あまり多く持たない学生に比べ，日常生活の生活場面で苦手な場面に直面しやすいことなどからストレスを感じやすく，その中でも，自分なりの対処スキルを持ち合わせていないなどの理由から困り感を多く抱えている学生は，特に大きなストレスを感じやすいために，精神健康度が低くなっている可能性があると考えられ，支援の必要性が高い状態にあるといえるのではないだろうか。

自閉症スペクトラム各群の学生が大学生活で苦手に感じる内容の分析

臨床心理学を専門とする大学生・大学院生計9名により，自由記述回答を自閉症傾向低群・中群・高群の各群に分けた上でKJ法（川喜田，1967）によって分類したところ，大カテゴリーの数は，自閉症傾向低群では5個（I～

V），中群では6個（I～VI），高群（Figure 2）では7個（I～VII）であった。自閉症傾向低群（ $n=76$ ）の回答の総件数は117件（1.54件/人），中群（ $n=182$ ）の回答の総件数は335件（1.84件/人），高群（ $n=83$ ）の総回答数は178件（2.14件/人）であった。内容の領域に関しては，低群，中群，高群ともに学業に関する内容が最も多く，次いで，人間関係，学業以外の学生生活，進路に関する内容の順に多かった。

内容を見ると，自閉症スペクトラム傾向3群（低群，中群，高群）の学生が，大学生活において共通して苦手を感じる内容がある一方で，各群のみで回答される内容も散見された。学業カテゴリでの〈レポートの具体的な執筆過程〉などレポートについての内容や〈グループワーク〉など授業内のグループ活動に関する内容，人間関係カテゴリでの〈人間関係〉，学業以外の学生生活カテゴリの〈早起き〉や〈お金のやりくり〉，進路カテゴリでの〈就職活動への不安〉や〈進路について考えること〉などは，学生全体である程度共通して回答されていた。一方，中群における〈記憶〉，〈聴覚刺激に弱い〉，高群における〈考えを行動に移すこと〉，〈見通しが立たないこと〉，〈人の話を聞いていないことがある〉など，自閉症傾向が高い群になるに

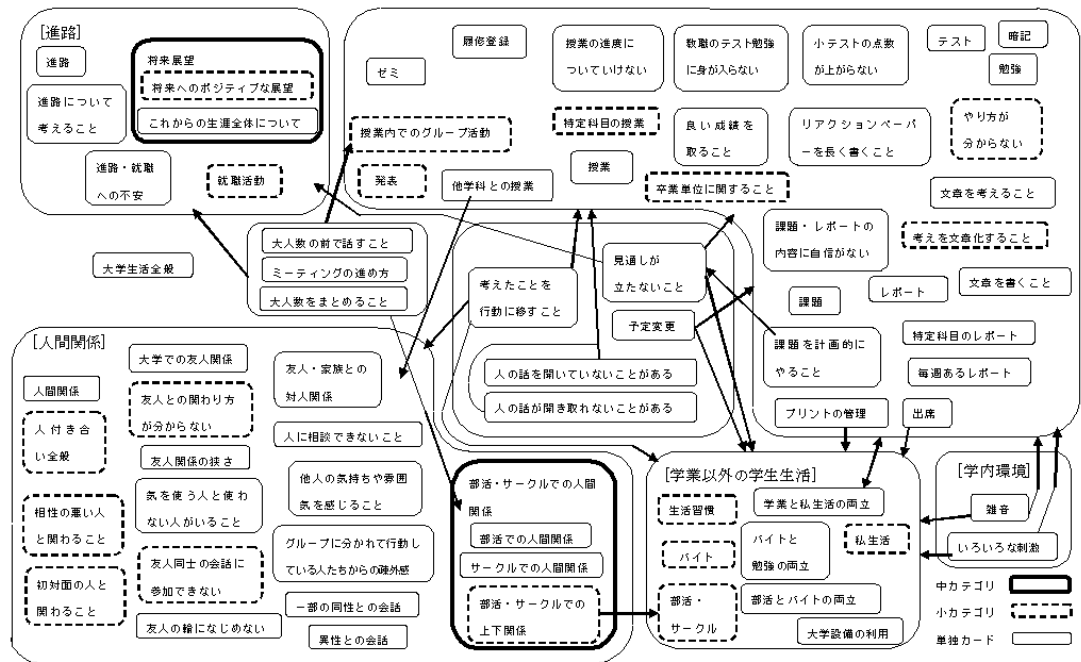


Figure 2 自閉症傾向高群の学生が苦手と感じている内容

つて、学業や人間関係等の特定の大きなカテゴリに含めることが難しい内容、あるいは、複数のカテゴリに関係するような内容の回答が増えた。これらの回答をはじめ、高群における、人間関係カテゴリの〈友人の輪になじめない〉や〈他人の気持ちや雰囲気を感ずること〉、進路カテゴリでの〈将来へのポジティブな展望〉などの回答からは、自閉症スペクトラムの特性との関連も推測された。

これらのことを考慮すると、まずは、自閉症スペクトラムの特性に近い苦手さを持つ学生が少なからず潜在する可能性を考慮した上で、多くの学生が苦手を感じる領域に関して、授業環境や設備面でのユニバーサル・デザイン化など、問題を生じさせないための予防的な支援を行っていくことが可能であると考えられる。例えば、学業に関する支援を考えると、教員や支援者の大きな負担とならない範囲での授業内容・方法の改善を行う。具体的には、「人の話が聞き取

れないことがある」または「授業の進度についていけない」といった苦手さを抱える学生がいることを考慮した上で、講義内容をパワーポイントやスライドで示し、レジュメの形で配布する、などの配慮が可能であると考えられる。そして、そうした全体に向けての各領域での配慮を行った上で、カバーしきれない学生個々の支援ニーズに対応していくためには、どこに相談すれば良いかが明確で、かつ、インターネットの活用など、物理的にも精神的にもアクセスしやすい相談窓口を設けるなどの支援環境の整備を合わせて実施していく必要があるのではないだろうか。

今後の課題

今後の課題としては、自閉症スペクトラム傾向の高い学生が、学生生活の中でどのような苦手さを感じるのかをより詳細に調査するとともに、それに対して学生自身が具体的にどのような

な支援を求めているかを探っていくことが必要であるだろう。また、支援実施の際には支援者側が支援方法の選択肢を提示して提供する形式となることが予想されるため、成功事例の蓄積による支援方法リストの作成・充実が求められるが（内藤，2009），自閉症スペクトラム傾向が高い人の中でも、支援を必要としていない人が、大学生生活で感じる苦手さにどのように対処しているかを探ることで、成功事例の蓄積にも寄与することが可能であると考えられる。ただ、一般的に大学生生活が社会に出る前の最後の準備期間としての側面を持つ以上、こうした検討を進めていく上では、単に大学生生活に対しての支援に留まらず、卒業後の社会生活への適応にどう活かし、つなげていくかという視点も不可欠であるだろう。

引用文献

- 浅川潔司・市橋真奈美（2007）. AD/HD的行動傾向が大学生の大学適応感に及ぼす影響 兵庫教育大学研究紀要, **30**, 19-23.
(Asakawa, K., & Ichihashi, M. (2007). Affects of behavioral tendency in the AD/HD suspected college students on the abjustment to their college: A school psychological study. *Journal of Hyogo University of Teacher Education*, **30**, 19-23.)
- Baron-Cohen S, Wheelwright S, Skinner R, Martin J, Clubley E. (2001). The autism -spectrum Quotient (AQ) : evidence from Asperger syndrome/ high-functioning autism, males and females, scientists and mathematicians. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, **31**, 5-17.
- 土井由利子・尾方克巳（2000）. 痴呆症状を有する在宅高齢者を介護する主介護者の精神的健康に関する研究 日本公衆衛生雑誌, **47** (1), 32-45.
- (Doi, Y., & Ogata, K. (2000). Psychiatric distress and related risk factors of family caregivers who care for the demented elderly at home, *Japanese Journal of Public Health*, **47** (1), 32-45.)
- 福田真也（2007）. 大学教職員のための大学生のこころのケア・ガイドブック精神科と学生相談からの15章 金剛出版.
(Fukuda, S.)
- 飯田順三（2004）. 高機能広汎性発達障害（アスペルガー症候群）の理解と対応 特別な教育的支援を必要としている子どもたち高機能自閉症（アスペルガー症候群）－理解・啓発ガイドブック－第2部, 1-3.
(Iida, J.)
- 飯島恵（2005）. 軽度発達障害の問題点と対応－ADHD（注意欠陥多動性障害）, アスペルガー障害を中心として－ 順天堂医学, **51**, 501-508.
(Iijima, M. (2005). How to approach mild developmental disorders such as attention deficit hyperactivity disorder (ADHD) and Asperger disorder. *Juntendo Medical Journal*, **51**, 501-508.)
- 川喜田二郎（1967）. 発想法－想像性開発のために 中央公論社.
(Kawakita, J.)
- 北添紀子・藤田尚文・寺田信一・是永かな子・泉本雄司・植田啄佐（2009）. 大学生における自閉症スペクトラムの調査－the Autism-Spectrum Quotient結果の分析－ LD研究, **18** (1), 66-71.
(Kitazoe, N., Fujita, N., Terada, S., Korenaga, K., Izumoto, Y., & Ueda, M. (2009). Investigation on the autistic spectrum of university students: analysis of the results of autism-spectrum quotient. *Japanese Journal of Learning*

- Disabilities*, **18** (1), 66-71.)
- 小林由佳 (2006). 大学生における軽度発達障害に関する調査とその支援 明治安田こころの健康財団研究助成論文集, **42**, 30-36. (Kobayashi, Y.)
- Kurita H, Koyama T. (2006). Autism-Spectrum Quotient Japanese version measures mental health problem other than autistic traits. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, **60**, 373-378.
- 栗田広・長田洋和・小山智典・宮本有紀・金井智恵子・志水かおる (2003) 自閉症スペクトル指数日本版 (AQ-J) の信頼性と妥当性 臨床精神医学, **32** (10), 1235-1240. (Kurita, H., Osada, H., koyama, T., Miyamoto, Y., Kanai, C., & Shimizu K.)
- 栗田広・長田洋和・小山智典・金井智恵子・宮本有紀・志水かおる (2004). 自閉症スペクトル指数 日本版 (AQ-J) のアスペルガー障害に対するカット・オフ 臨床精神医学, **33** (2), 209-214. (Kurita, H., Osada, H., koyama, T., Kanai, C., Miyamoto, Y., & Shimizu K.)
- 黒崎充勇・増田幸枝・岡本百合・矢式寿子・松山まり子・石原令子・岡田真紀・杉原美由紀・古本直子・内野悌司・磯部典子・栗田智未・二本松美里・横崎恭之・日山亨・吉原正治・山脇成人 (2009). 広汎性発達障害をベースに持つ大学生の診断や援助のあり方について—自閉症スペクトラム指数日本語版 (AQ-J) の使用経験からの提言— 総合保健科学, **25**, 1-9. (Kurosaki, M., Masuda, S., Okamoto, Y., Yashiki, H., Matsuyama, M., Ishihara, R., Okada, M., Sugihara, M., Furumoto, N., Uchino, T., Isobe, N., Kurita, T., Nihonmatsu, M., Yokosaki, Y., Hiyama, T., Yoshihara, M., & Yamawaki, S.)
- 水野治久・石隈利紀 (1999). 被援助志向性, 被援助行動に関する研究の動向 教育心理学研究, **47**, 530-539. (Mizuno, H., Ishikuma, T. (1999). Help-Seeking Preferences and Help-Seeking Behaviors : An Overview of Studies. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **47**, 530-539.)
- 文部科学省 (2003). 「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」調査結果 <http://www.mext.go.jp>. (Ministry of Education, culture, Sports, Science and Technology.)
- 文部科学省 (2010). 平成22年度学校基本調査 <http://www.mext.go.jp>. (Ministry of Education, culture, Sports, Science and Technology.)
- 中川泰彬・大坊郁夫 (1985). 日本版GHQ精神健康調査票手引 日本文化科学社 (Nakagawa, Y., & Daibo, I.)
- 内藤美菜子 (2009). 高機能広汎性発達障害のある大学生の学生生活の実態と支援ニーズに関する研究 早稲田大学人間科学研究科修士論文. (Naito, M.)
- 内藤孝子・山岡修 (2007). LD等の発達障害のある人たちの教育から就業に向けた課題, 必要な支援とは—全国LD親の会・会員調査から—LD研究, **16** (2), 214-230. (Naito, T., & Yamaoka, O. (2007). Problems and support for people with developmental disabilities including LD: from school to work a perspective of Japan parents' association of learning disabilities. *Japanese Journal of Learning Disabilities*, **16** (2), 214-230.)
- 斎藤清二 (2010). 高機能発達不均等大学生への支援—ナラティブ・アプローチの観点から— 学園の臨床研究, **9**, 1-12. (Saito, S.)
- 佐々木司 (2010). 大学・大学院における自閉

- 症スペクトラムの学生 精神科治療学, **25** (12), 1647-1652.
(Sasaki, T.)
- 田村修一・石隈利紀 (2001). 指導・援助サービス上の悩みにおける中学校教師の被援助志向性に関する研究—バーンアウトとの関連に焦点をあてて— 教育心理学研究, **49**, 438-448.
(Tamura, S., & Ishikuma, T. (2001). Help-Seeking Preferences and Burnout : Junior High School Teachers in Japan. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **49**, 438-448.)
- 田村修一・石隈利紀 (2006). 中学校教師の被援助志向性に関する研究—状態・特性被援助志向性尺度の作成および信頼性と妥当性の検討— 教育心理学研究, **54**, 75-89.
(Tamura, S., & Ishikuma, T. (2006). Help-Seeking Preferences of Junior High School Teachers in Japan : Reliability and Validity of the State-Trait Help-Seeking Preferences Measure, *Japanese Journal of Educational Psychology*, **54**, 75-89.)
- 十一元三 (2006). アスペルガー障害と高次対人状況 こころのりんしょう, **25** (2), 241 -245.
(Toichi, M.)
- 辻井正次・宮本淳 (2000). 自閉症スペクトラムの高機能群における社会適応とケアの問題 臨床精神医学, **29** (5), 495-499.
(Tsujii, M., & Miyamoto, A.)
- 若林明雄 (2003) 自閉症スペクトラム指数 (AQ) 日本語版について. 国立特殊教育総合研究所科学研究費報告書「自閉症とADHDの子どもたちへの教育支援とアセスメント」, 47-56.
(Wakabayashi, A.)
- 山崖俊子 (2008). 学生相談における軽度発達障害の見立てに関する考察—20年後にアスペルガー障害と診察された事例の調査面接を通して— 学生相談研究, **29**, 1-12.
(Yamagake, T. (2008). Study in psychological diagnosis of high-functioning developmental disorder in student counseling: through an interview of a case in which a client was diagnosed as Asperger's syndrome only after for 20 years, *Japanese Journal of Student Counseling*, **29**, 1-12.)

Influence of the symptoms of autistic-spectrum disorder on the mental health condition, help-seeking preference and campus life of university students.

Daiki TAKABAYASHI *, Yasushi FUJII **, and Jun KANNO **

* Graduate School of Human Sciences, Waseda University

** Faculty of Human Sciences, Waseda University

Abstract

The present study examines how the symptoms of autistic-spectrum disorder on mental health condition and help-seeking preference of university students. Results showed that individuals with more symptoms of autistic-spectrum disorder tended to have worse mental health than did those with less symptoms. However, help-seeking preference and mental health condition were only weakly correlated. Furthermore, we examined the relationship between the symptoms of autistic-spectrum disorder and the difficulties of campus life. We found that, many students have similar difficulties. On the other hand, other difficulties; *“read the atmosphere or the feeling of others.”*, *“positive prospects for the future.”* and so on, included those of people with autism tend to have, were answered only by the group of students with more symptoms of autistic-spectrum disorder.

Key words : autism-spectrum disorder, university students, mental health, help-seeking preference